
愚か者たちによる滑稽な物語～百戦錬磨の負け男～

緑の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚か者たちによる滑稽な物語〜百戦錬磨の負け男〜

【Nコード】

N6451Y

【作者名】

緑の人

【あらすじ】

よくある話だ。

異世界に転生して、バランス崩壊のチート能力をもらい、美少女たちにその勇士を余すところなく見せつけ、悪事を働く者をことごとく叩き伏せる――。

そういう物語の主人公になったはずなのに、どうして俺はまた負けてるんだろう。

プロローグ

はっと気がつくと、そこは学校だった。

ありふれた黒板に、並べられた机と椅子。

窓から外を見れば整地されたグラウンドがある。

グラウンドの傍には体育館、そしてプールが備わっている。

どこをどう見ても、誰もが思い描くまさに『学校』だった。

ありふれた風景のはずなのに、同時にどこか異質な印象を受けた。

誰も人がいないからだろうか？教室を見渡しても、グラウンドを見渡しても、人の姿も声も——気配すらもない。

「あ……れ？」

知らずに疑問符が口から漏れる。

異質なのは場所だけではなかった。

なぜなら、どうして自分がこんなところに居るのが分からないから。

ここが学校であることは明白だ。問題は、この学校に全く見覚えが無いこと。

それどころか、ここに来るまでの過程の記憶がごっそりと抜け落ちていた。

やかましい目覚ましに起こされ、出来合いの朝食を食べ、時間に追われながら身支度を整え、友達と一緒に登校する――そんなありふれた記憶が、ない。

昨日の記憶も、

一昨日の記憶も、

一昨々日の記憶も、

一切、無い。

忘れるはずのない自分の名前さえもわからない。

「記憶喪失……ってやつか？」

確認するように呟く。

不安げに自分の掌を見つめる。

「呑気なものだな」

「!？」

返ってくるはずのない返事に、彼は驚いて声のした方を振り向く。

「よう」

つい十秒前にいなかったはずの男が、あたかもずっと居ました、と言わんばかりの体でそこに居た。

二十歳くらいの男だ。黒髪黒目で体の線は細い。が、鋭い双眸が『優男』という言葉を限りなく似合わないものにしていた。

男は、何故か喪服に身を包んで机の縁に腰かけていた。

気軽に話しかけてくるが、面識はもちろんない。

探るべき記憶が無いのだから、彼からすれば誰であっても初対面だ。

「誰……?」

短く簡潔に一言で問う。

男は唇の端を歪めて答える。

「お前の『これから』についての案内人、といったところだ」

「『これから』……?」

机から降り、男は胸の前で十字を切る仕草をする。

「まずはお悔やみ申し上げようか。災難だったな?」

「は?」

話の意図が掴めず混乱する。

そんな彼に、男は言葉を放った。

この不可解な状況を一発で理解させてくれるような、魔法の言葉。

「お前は死んだんだよ」

何の変鉄もない交通事故だった。

道端に飛び出した小さな子供を庇って車に跳ねられた。

法定速度を遥かに超過した鉄の塊はあっさりと彼を弾き飛ばし、数メートル先の壁に衝突させた。

医者が出る幕もない、完全な即死だった。

「死んだ……俺、が？」

「簡潔に事実だけを述べるとそうだ。理解したか？」

「それじゃここは死後の世界ってことか？」

「厳密に言うとは違うが……お前たちからすれば、まあ間違っていない表現だな」

彼は目を閉じる。

見知らぬ学校。

異質な空気。

欠けた記憶。

『これから』の案内人。

にわかには信じ難いが、ここが死後の世界となるとこれらすべてに納得のいく説明がつく。

どの道、記憶が無いのだから疑っても時間の無駄だろう。

そう判断する。

「……わかった。それで、俺はこれからどうなるんだ？」

続きを促す彼の胸中は、何故か踊っていた。

よくある小説のような展開だからだろうか。

いわゆる『チート』という言葉でひとくくりにされる反則的な超能力の数々。

そういったものと過去の記憶を保持した状態で異世界へ転生し、数々の功績を上げ、美少女たちと出会い、親密になっていく。

これはそういった物語によくあるプロローグにそっくりだ。

生前に読んでいたであろう小説のタイトルはもちろん思い出せないが、そんな感じの物語をいくつも読んだような気がした。

「——なるほどな。そういった展開が望みなのか」

男がニヤリと笑う。

胸中を読まれた事に驚いたりはない。ここが死後の世界で、目の前の男が案内人——神か閻魔か——という存在である信憑性が増しただけだ。

「道理で適応力が高いわけだ。普通、自分が死んだ、なんて言われたら信じずに俺を誘拐犯か何かと勘違いして暴れ喚くか、信じてもしき返らせると無理難題を言って暴れ喚くかのどちらかだからな。すんなりと信じたのはお前が初めてだ」

「記憶が無いんだ。生前の事に未練なんてあるわけないさ。それで、どうなんだ？俺に反則的な能力を与えて異世界へ転生するというのはできるのか？できないのか？」

「……………もちろん、可能だ」

男は断言した。

「本当か!？」

「ああ。ただし、お前の言葉で言うところの『転生先の異世界』は選べない。そしてお前の言葉で言うところの『反則的な能力』を与えはするが、それでお前の望む展開になるかどうかは保障できない」

「十分だ!! ええと……」

「俺に名前はない。好きに呼べばいい」

「じゃあ、ルシファーにしよう。ルシファー、ありがとう!」

彼のその言葉に、男——ルシファーは目を丸くする。

「お前面白いな」

ルシファーが指を鳴らすと、足元が淡く発光する。

魔法か何かだろうか? 種も仕掛けもない光に、また彼の心は高まった。

「——そうだ。名前を付けてもらった礼に、俺からもお前に名前を贈ろう」

ふと、思い出したように告げる。

「え？いいよ、前の名前を覚えてくれれば」

「遠慮するな。新しい世界へ行くんだ。心機一転、名前も新しくしよう」

前もって決めていたのだろうか。ほとんど間を置かずルシファーは新たな名前を告げる。

「お前はこれからクロウだ」

「クロウ……いいね、なんかっこいい。気に入った！」

「よし、クロウ。新しい世界で存分に——」

ルシファーが言い終える前に、世界が暗転する。

そして、彼にとっての、長い、長い——本当に、長い物語が、幕を開ける。

第一話「はじめての敗北」

見渡す限り、木、木、木。

整然と並んではおらず、それぞれが勝手気ままな位置から生えて、ただでさえ悪い視界をさらに狭めている。

そのどれもが、見た事のない種類の木だ。

それらにくっ付いている虫にも、見覚えはない。

そして頭上に描かれる星の位置も——なんとなく、という程度だが——違う。

視界に映るものすべてに違和感がある。

ルシファーの言った通り、どうやらここは異世界のようなのだ。

「……って、これだけで信じるってのも何だな」

ルシファーが嘘を言っていたようには感じなかったが、かといって本当の事を話してくれた保証もない。

まずは信じなければ始まらない。だが確信が持てない。

ルシファーなる人物は彼の脳が生み出した架空の人物で、これは単なる夢であるという可能性も、完全には潰えていないのだから。

夢か幻か。

嘘か真か。

虚か実か。

それを実証するためには、これが一番手っ取り早いだろう。

というより、気になって気になって仕方がない。

「まずは俺に宿っている『反則能力』がどんなものなのかを確かめよう！」

拳をつくり、手近な木に狙いを定める。

「せいっ！」

遠慮のない一撃。

それは痛撃だった。

「————っ!!」

彼にとって。

声にならない悲鳴を上げ、痛む拳を押さえて悶える。

どうやら『反則能力』は、身体能力とは無関係のようだ。

ようやく立ち上がれるまでに回復したクロウは、改めてそう判断する。

「ってことは、俺は魔法使いかな」

魔法。それは異世界のお供。

そして世の中の『反則能力』の半数以上は、この魔法と密接に関わりがある（と、彼は考えている）

常人が百内包している魔力を、ひよっとすると自分は万内包しているかもしれない。

素人では五元素しか使えない魔法を、自分はそれ以上使えるかもしれない。

凡人では発動までに五手かかる手順を、自分は一手で発動できるかもしれない。

はじめからこっちを試せばよかったと、彼は左の掌を掲げる。

体内に宿る魔力。それに呼びかける。

対象は木。我が右手に害を成した、忌むべき『敵』。

彼の怒りに呼応するように、体内が熱くなる。

『敵』を倒せと、怒り狂う。

クロウはその怒りを明瞭なカタチに変え、掌の先から迸らせる……
！！

「炎よ……！！！」

効果は絶大だった。

予想を遥かに超えて巨大な火柱が上がり、対象だけでなく周辺の木や草も諸共に焼き尽くした。

木々で埋め尽くされた森に、ぽっかりと小さな空き地ができる。

彼の脳内で。

「……何にも起こらねえじゃねえか！」

どうやら、クロウの『反則能力』は身体能力でも魔法でもないらしい。

（だとしたら、何だ？）

周辺の搜索をしながら、思いつく限り——かなり限られているが——反則能力を考えてみる。

ベクトルを操作する能力——

モノの『死』を視ることができる能力——

あらゆる魔法の構成を複写できる能力——

魔術文字を操ることができる能力——

ひび割れた世界を指先で「ちょい」と弄るだけであらゆる破壊を生み出す能力——

I……

c a n……

「フアアアアアアアアアアイ！！」

どぼーん、という豪快な音と共に水柱が上がる。

歩いているうちに、海らしき場所へと辿り着いた。

ひょっとしたら宇宙人と交信できる能力かと考えて、なんとなく崖——と言っても、水面から二メートル程度だが——から飛び降りてみたが。

「何もあるわけねえよな……」

やっぱり自転車で前の籠に布団に包まるのが大好きな見目麗しい美少女を乗せていないとダメなのか、失敗に終わりとぼとぼと浜辺に戻る。

そしてふと、ずぶ濡れになった自分の体を見やる。

「俺が崖から飛び降りてずぶ濡れになったという現実を『無かったことにした』」

……。

当然だが、現実が虚構になることなどない。

「ちくしょう！能力なんて何にも無いじゃねえか！！」

怒りに任せて砂を蹴るが、それで気分が晴れるわけもない。

「ルシファー！見てんだろ！出てこい！出てきて俺の能力について懇切丁寧に説明しろ！！」

叫んでも、もちろん反応は返ってこない。

あると思っていた能力は無く、説明を求めようにも誰もいない。

「くそがつ!!」

やけになって、クロウは大の字になってその場に寝転んだ。

そこで自分の頭上にある『モノ』に気付く。

「……ん?なんだこれ」

それは一言で言うなら、棒だった。

鮮やかな蛍光の緑色をしていて、掌をめいっぱい広げた状態の親指と小指の間くらいの長さだ。

棒の右端部分は何かに擦れたように黒ずんでいる。

「俺の能力に何か関係があるのか?」

手を伸ばしてみるが、空を切るだけで『それ』には触れることはできない。

ほとんど縫るように——これ以外、何も特別な発見が無かったのだ——思考する。

が、頭上に浮かんだ『これ』に関連しそうな能力は、クロウの狭い狭い記憶領内には存在しなかった。

「だー! わかんねえ!」

イライラしながら砂浜を歩き回る。

そして、とある一点に足を踏み入れた瞬間、頭の中に『声』が響く。

——チェックポイント通過——

「——え？」

思わず、聞き返す。

しかしそれ以上は何も聞こえない。

だが、確かに聞こえた。

——チェックポイント通過——、と。

足元に目をやる。

『チェックポイント』というくらいだから何かあるのだろうと期待したが、何もない。

その場所を注意深く掘ってみる。

やはり何もない。

「……意味わかんねえ」

もはや考えるのも面倒になり、頭の片隅にそれを追いやる。

超常的な現象は起きているのだから、とりあえずここは異世界だろう。

投げやりにそう断じる。

同時に、身体能力・魔力・その他諸々、飛び抜けたものは何もないと判断する。

「一体何なんだよ。普通こういうのはデフォルトで何でもかんでも飛びぬけてて、さらに分かりやすくて使いやすくてとんでもなく強い能力がさも当たり前のように存在してるもんだろ。挫折？何それおいしいの？みたいな強くてニューゲーム状態。それが異世界でのテンプレートだと思ってたのに、何で何も起こらないんだ！？ていうか俺、全然強くなってるじゃないじゃん！！おまけに頭の上には意味わからん棒が浮かんでやがるし何もない砂浜歩いてたらチェックポイントどうたらとか言いやがって——責任者出てこい！」

益体もないことを延々と愚痴っていると、

「た、助けて！！」

いきなり悲鳴が聞こえてきた。

驚いてそちらを見やると、一人の少女がこちらに向かってすごい形相で駆けてきた。

綺麗な赤色の髪を肩くらいまで伸ばした快活そうな少女だ。着ている服はクロウの目から見るととてもなく露出が高い——彼の言葉で表現するなら、バスタオルみたいな布を体に巻いた状態で膝まで

届くブーツと肘くらいまで届きそうな穴空きの手袋を付けている。

年の頃はクロウよりも下のようだ。必死そうな表情で、残念ながら『可愛い』という単語は彼の脳内に浮かんでこなかった。

それもそうだろう。

後ろから、熊のような動物に追いかけられたりしている状態で可愛げなんて出している余裕があるのは漫画の中だけの話だ。

生き死にかかっている時に、そんな事をしている暇などない。

「なにやってんだ!？」

遅まきに事情を理解して、クロウは慌てた。

「知らない!とにかく助けて！」

「助けろって言っても……」

クロウは熊のような動物——これが噂に聞く『魔物』とやらだろうか。面倒なので以下、熊と称す——を見上げる。

正確な大きさは分からないが、クロウよりも頭数個分は背が高い。漆黒の毛に覆われ、両手には鋭い爪が生えている。人間くらいならいとも簡単に引き裂いてしまえそうだ。

どこぞの夢の国に居るマスコットキャラクターにはほど遠い凶暴そうな顔。口にはもちろん一噛みで人間を喰らえそうな牙がある。

「無理だろ…………いや、まさか!？」

三十六計、逃げるが勝ち——そう思った瞬間、脳裏にひらめきが走る。

——もしかして、この熊と戦い追いつめられることで、秘めたる能力を開花させる仕組みになっているのでは?と。

能力を解放した自分は熊など相手にならず、結果的に少女を助けることになる。

そしてこの奇抜な服装の少女とフラグを確立しつつ——こんな状況でなければ、きっと可愛いに違いない——、様々なタイプの美少女を虜にしていき、やがてこの国、この世界を牛耳る覇王となる。

「これだ!!」

「何が!？」

「気にするなこっちの話だ!とにかくここは俺に任せろ!」

「わかったありがとう!あなたの犠牲は無駄にしないよ!」

恐らくは、初めからこちらに注意を寄せて逃げる算段だったのだろう。

トップスピードのまま、クロウの横をすり抜ける少女。

こんなもの、人間に勝てるわけがない。彼女の判断は正しい。

（しかし、すぐにその認識を改めることになる）

クロウはくっく、と少し危なげな笑みを浮かべながら、を挑発するように、手を、くい、と曲げた。

「よっしゃ来いや熊！お前には俺の反則能力の第一被験者になってもら——」

容赦なく振り下ろされた熊の一撃。

脳天に直撃したそれは当然のようにクロウの意識を根こそぎ刈り取った。

第一話「はじめての敗北」(後書き)

更新が遅くて申し訳ありません。

第二話「敗北に次ぐ敗北。そして発見」

痛みはほとんど感じなかった。

ただ、一瞬の浮遊感。

そのすぐ後に。

「――え」

彼は、砂浜に一人、佇んでいた。

少女の姿も、熊の姿も忽然と消えている。

熊の一撃を喰らったところまでは覚えているが、その後の記憶がぶつつりと途切れている。

十中八九、気絶したのだろうが、それにしておかしい。

まず、自分が『立っている』こと。

気絶したのなら倒れているのが自然だろう。

仮に立ったまま気絶したのなら、熊がそのままにしておくはずがない。

次に、『少女と熊の足跡が無くなっている』こと。

ここは砂浜だ。歩けば足跡が必ず付く。

クロウの記憶が正しければ、熊と少女が走った場所は誰かが通ったと確実に分かる足跡が付いていたはずだ。

それが、ない。風や波や雨で無くなったのではなく、初めから、ない。

そして、最大の違和感――。

彼は、自分の頭――ちょうど、熊に殴られた場所――を抑えた。

「痛くない」

まるで、はじめから殴られてなどいなかったかのようにだった。

「一体全体、どうなってる……？」

わけがわからない。

「……そうだ。あの女の子」

あの奇抜な服装の少女を見つけられたら、何か分かるかも知れない。

そう思い、クロウは少女が逃げた方向へと足を向ける。

その、時だった。

「た、助けて!!」

ちょうど彼の背中から、声がかかった。

何やら聞き覚えのある声。

彼が振り返ると、

「は？」

先ほどの少女が、相変わらず凄い形相で逃げている。

そして、彼女の後ろには――あの、熊がいた。

「なにやってんだ!逃げたんじゃなかったのか!？」

「――は?何言ってるの?」

少女が困惑したように眉をひそめる。

「さっき、俺が囧になってやっただろ!また見つかって追い掛けられてんのか!？」

「さっきって……この砂浜に来たのはこれが初めてだけど?ていうか、あなたと会ったのも初めてなんだけど!？」

「初めて会った……だって？」

今度はクロウが困惑する番だった。

「馬鹿言え！さっき会っただろうが！それで、俺が自分の能力を開花させる為に――」

「あーもう、何言ってるのかわかんない！けど、ひとつだけ分かったわ」

前のめりになって説明するクロウをジャスチャーで遮って、少女は軽く地面を蹴った。

クロウより遥かに小柄な少女が、彼の身長を超えて跳躍する。

あまりの非常識さと華麗さに、クロウは説明を中断して見惚れてしまった。

少女の着地先は、前のめりになっていたクロウの背中。

「てい」

「のわ?!」

クロウの背中を蹴ってさらに跳躍し、少女は熊から三メートル以上の距離を一気に離すことに成功した。

代わりに、クロウは体制を崩した状態で、熊との距離を一メートル未満にまで縮める。

熊はクロウを餌と見なし、その腕を振り上げる。

「あなたが囿になってくれるってことだけは理解したわ。それじゃ成す術もなく熊の一撃に倒れ伏すクロウの背中に、そんな言葉が投げかけられた。」

一瞬の浮遊感。

そして気付けば、クロウは砂浜に一人で立っていた。

立った状態で、少女と熊が居た痕跡が無くなっている。

頭をさするが、やはり痛みもない。

「まただ……」

さっきと同じ違和感。

ふと、クロウは足元を見やる。

平坦な砂浜に、ただ一か所だけ窪んだ場所があり、クロウは今まさにそこに立っている。

それは、先ほどの声がした場所だった。

——チェックポイント通過——、と。

ひょっとして気付かなかっただけで、さっきもこの場所に立っていたのではないだろうか？

「……まさか」

自らの掌を見やる。心なしか、震えている。

「――俺の能力っていうのは」

「た、助けて!!」

独白を遮るように、少女の声。

そちらを見やる。驚いて目を向けるのではなく、確認するように冷静に。

奇抜な服装の少女と、その数メートル後ろには熊。

変わらない構図。

（二度あることは三度ある）

胸中でそううめいて、クロウは自分の背後を差した。

「事情は分かった！こいつは俺に任せて先に行け！」

「……？わかったありがとう！あなたの犠牲は無駄にしないよ」

クロウの、事態の呑み込みの早さに面喰いながらも、少女は彼の

隣を駆けて行く。

両手を広げ、クロウは熊に『とおせんぼ』をする。

振り下ろされた一撃が、やはり一発で彼の意識を鎮めた。

一瞬の浮遊感。

「やっぱりそうだ」

クロウは窪んだ地面から移動しながら、考えをまとめるように口に出す。

「俺の能力、それは『死ぬor気絶すると何度でも時間を巻き戻して、やり直すことができる』『その際の再スタート場所は、この『チェックポイント』である』だ！」

この能力によって、熊の攻撃により気絶or死亡（たぶん後者っぽい）した瞬間、時間は数分前に巻き戻った。

数分前の砂浜には少女も熊も、まだ来ていない。よって足跡も付かない。

そして、熊による攻撃も受けていない。だからどこも痛くない。

巻き戻った時間での再スタート地点は、この『チェックポイント』だ。

これならこの一連の不可解な状態に納得のいく説明ができる。

たった三度、時間の巻き戻しを繰り返しただけでここまでの結論に辿りつけた自分に、クロウは自身を褒めてやりたくなった。

そして同時に、怒鳴りたくなった。いや、たまらず怒鳴った。

「これの、どこがチート能力だあああああ！！！！！」

天を仰いで吠える。

「いくら時間を巻き戻しても、俺自身がへばいままだったら全つつつく意味ねえじゃねえか！俺が言いたかったチート能力ってのはなあ、もっとこう、安心感と爽快感の溢れる……」

「た、助けて！！！！！」

「うるせえ！！！」

もはや聞きなれた登場句に、クロウは反射的に怒鳴り返していた。いきなりの挨拶に、少女の目尻が吊り上がる。

「こんなか弱い女の子が助けを求めているのに、うるせえって何よ！？」

「何がか弱いだ！人を囮——いや、生贄に使いやがって！」

「いつ、誰が、どこで、そんなことをしたの！？今初めて会ったばかりでしょ！」

「今、お前が、ここで、そういう事をするんだよ！」

少女は足を止めて徹底抗議に出てきた。クロウの真正面から喚き散らす。

「はあ！？なによあなた、預言者気取りのつもり？『そういう事をする』って、まるで未来の事が分かってるみたいに偉そうに！」

「わかるんだよ！今見てきたからな！人をまるで身代わり人形みたいに扱いやがって——」

こんな事を言っても、当然少女には伝わらない。

しかし意図していなかった意味不明な能力を授けられ、その怒りをどこにぶつけていいのか分からないクロウに、そんな配慮をするような余裕はなかった。

「お前お前って……私にはちゃんとリインって名前があるんだからね！！あなた、さっきから失礼よ！」

「それなら俺にもクロウって名前があるんだ！だいたい——」

ふ、と。

前触れもなく月の光が遮られて、クロウは怒りで忘れていた今の状況を思い出す。

手を伸ばせば届く距離に、熊がこちらを見下ろしていた。

寧猛なその目は言い争いを傍観している——という体ではなく、ただ単に二匹に増えた獲物のどちらから仕留めようかと迷っている風に見えた。

熊はほんの少しの逡巡の後、少女——リィンに向かって腕を振り上げた。

「危ない！」

何故かはわからないが、クロウの体は意識とは無関係にこの腹立たしい少女を守るために勝手に動いていた。

咄嗟に覆いかぶさるようにして少女を押し倒す。その際、熊の剛腕がクロウの腕をかすめた。

「あぐっ!？」

砂浜に押し付けられ、女の子っぽくない悲鳴を上げるリィン。

「大丈夫かっ」

「う、うん。って、あなた腕が」

「かすっただけだ。問題ない」

思っていたより痛みは少ない。

攻撃を避けられ、熊はさらに追撃を加えようと腕を横薙ぎに振るう。

座っている状態ではどうすることもできない。

避けようと思えば避けられるかもしれないが、その場合クロウの下に居るラインに攻撃が当たってしまう。

受け止めるしかないと覚悟を決めて熊を見上げ——そして、ある事に気が付く。

クロウの頭上に居座る意味不明な緑色の棒に、変化が起こっていた。

緑色だった棒の三割ほどが、黒ずんだ色に変色していた。

「なんだ、これ……？」

ぼんやりと『それ』を眺めるクロウに、鋭い言葉が飛ぶ。

「危ない！」

「!？」

咄嗟に両腕をクロスさせて熊の攻撃を受け止める。

身長、体重の差は歴然。大自然で鍛え上げられた力を真正面から喰らい、クロウは一瞬で数メートル先の森の中まで吹っ飛んだ。

クロウを受け止めた木々が抗議するようにギィギィと軋んだ声を上げる。

「――てえ」

さすがに効いた。背中が鼓動に合わせてズキズキと痛む。

熊はどうやらこちらを先に餌にするように決めたようだ。傍でへたり込むリィンには目もくれず、一直線に突進してくる。

あの巨体をまともに喰らえば――まあ、あまりよろしくない未来が待っているだろう。

あれだけ派手にぶつかった割には、体は普通に動く。

（俺ってこんなに打たれ強かったっけ？）

なんて事を考えて、何気なくさっきの棒を見してみる。

「……また減ってる」

緑色の部分はもはや一割程度しか残っておらず、棒の大半は黒ずんだ色に変色していた。

時間の巻き戻しを開始した時点では、ほとんどの部分が緑色だった。

そして熊の攻撃がかすった時、緑色は三割ほど減少していた。

次の攻撃を受けた時、緑色は六割減少、今の状態となる。

「まさか、これって……」

脳裏に浮かぶのは、RPG、シューティング、アクション、あらゆるゲームに利用されている、『とある値』を示す棒――。

「もしかして、これって、俺の『HPゲージ』……?」

クロウの呟きは誰に聞こえる事無く、熊の体当たりにかき消された。

第二話「敗北に次ぐ敗北。そして発見」(後書き)

アクセス解析見るとモチベーション上がりますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6451y/>

愚か者たちによる滑稽な物語～百戦錬磨の負け男～

2011年12月1日04時11分発行